

律や科学の規範領域が知識の工業化社会において練成される表象の体系の領域になるのである。そしてそれは未開社会における集合意識と一致するのである。工業化社会における機械的連帯の残存である宗教、それは集合意識の内部における集合表象の領域なのである。ところが、社会分業論から数年して刊行された「方法論」<sup>32)</sup>になると、集合表象は成員たる個人には外在的であり、基体 *substrat* と関連するように結びつけられる。この基体とは「分業論」におけるように包括社会とか国民社会だけでなく、それは個々の集団 *groupes particuliers*<sup>33)</sup> も含められることになる。そしてこの集団から集合的表象の体系である思想 *pensée* が派生する。<sup>34)</sup> すなわち自発的に普及を求める規範的思想である。たとえば政治的表象はすべての市民の加入支持を求めるようになる。がさらに集合的思想の中に力動的 *dynamique* 急激な変動が生じるという考え方がでてくる。つまり集合的思想の中に社会的潮流が生じてくる。だから知識はそこでしばしば集団と構造的類似性をもってくる。デュルケームはそれにもう一つのことを加えている。<sup>35)</sup> 彼は限定された集団における集合的創造性の地盤を直覚的に見ぬいていたことである。つまり彼は二つの契機、社会全体の集合的創造と社会的潮流によってもたらされる集合的創造の二つを区別したのである。しかもそれは包括集団に含まれる個別集団についても適合するのである。こうして、デュルケームは「方法論」において集合意識の慣習から集合的悟性への移行という考え方を明らかにするのである。彼は「方法論」の中で<sup>36)</sup>次のようにのべている。「これら行為、思考の様式の一部は反復の結果一種の恒常性を獲得するが、それによって沈澱し、それらを反映する現象と切りはなされる。それは一体となり固有の可感的形態をとり、それらを表わす個人的事実と区別された独自の实在 (*réalité sui generis*) を構

成する。だから集合的慣習は相つぐ行為の中に内在化するだけでなく、きっぱりと定式化され、それが口から口へと反復され、教育により傳達され、文書によって確定する。法律、道徳規則や格言や俚諺や宗教団体の信条などとなって表現されるのである。こうした種類の知識の特殊性を示すのはこの通時的 *diachronique* な次元である。<sup>38)</sup>

1897年には「自殺論」が刊行されるが、この著作においてもデュルケームは知識社会学に二つの貢献をもたらしてくる。その一つは工業化社会のアノミーと知識に対する関係を更新したことである。分業は個人の反省的思考と科学新出現を可能ならしめたが、工業化社会のアノミー *anomie* は知識に対する要求を必然的なものとした。このアノミーの特殊な面は文化的アノミーであるが、宗教という面の集合意識の解体は知識に対する要求を必然的なものとしてくる。「自殺論」の中でデュルケームは「宗教を解体させるのが科学に対する覚醒なのではなく、宗教の解体がすでにはまっているため、科学の必要が痛感させるのである」<sup>39)</sup> という。というのは科学の覚醒は宗教にとって代るための手段ではないからなのである。「既存の信仰が時代の経過によって力を失ってくと、それを人為的に回復することは不可能で、悟性の力しかわれわれの生活を導くものはないのである。」そしてこのアノミーと科学的知識の社会的必要の相関関係はとくに人間に関する科学に関するものとなるのである。

第二の貢献は哲学的知識の社会学に対する要素を提供するものである。この点でデュルケームはモンテスキューとルソーから借用している。<sup>40)</sup> それはデュルケームが *humeur collective* (集合的気分) ということを感受性と国民社会の一般的精神 *l'esprit général* との関係について用いたことである。<sup>41)</sup> *Humeur collective* は全国民を事物を悲しみまたは喜びの気分に向わせるものである。

32) E. Durkheim, *Les règles de la méthode sociologique* を略して「方法論」として用いる。

33) 方法論では宗教集団、政党、職集団などがこれにあたる。(p. 4)

34) Namer, *op. cit.*, p. 45

35) 方法論 pp. 8-9

36) 方法論 p. 40

37) Namer, *op. cit.*, p. 47

38) *Ibid.*,

39) E. Durkheim, *Le Suicide*, p. 17

40) G. Namer, *Rousseau sociologue de la connaissance* 1978. p. 20

41) G. Namer, *La sociologie de la connaissance* (A. S. 1977) p. 48